

戦後朝鮮半島における日本人教会⁽¹⁾

李 元 重

I はじめに

1904年2月25日、旧日本基督教会（以下、日基と略する）伝道局が派遣した秋元茂雄が釜山に到着し在釜山の日本人を中心に伝道を開始した。⁽²⁾日本人による在朝鮮日本人伝道のはじまりである。その次、同年5月、木原外七が京城伝道を開始することによって旧美以教会、つまり日本のメソジスト教会の朝鮮伝道が始まり、⁽³⁾まもなく同年6月剣持省吾が京城に到着し、集会を開くことにより日本組合基督教会も伝道を開始した。⁽⁴⁾植民地朝鮮における日本人教会および集会の数は最大50、そこに属していた信徒は5400人を超えていた。⁽⁵⁾植民地朝鮮に対する日本人による伝道は、1910年代、日本組合基督教会による朝鮮伝道や乗松雅休、織田檐次などの個人伝道者の活動が主な研究対象になり、日本の教派教会による伝道およびその教会の様子はあまり注目されていなかったと言える。⁽⁶⁾しかし、植民地朝鮮で植民者、支配者として暮らしながらキリスト者として生きていたその有り様を明らかにするのは、植民地主義とキリスト教、そして日本のキリスト教の歴史的な性格を解き明かする一つの手がかりになるだろう。そこで筆者は、主に在朝鮮日基を中心にその様子を調べて来た。⁽⁷⁾

戦時期宗教団体法による日本基督教団の成立にしたがって、在朝鮮のすべての日本人プロテスタント教会は「日本基督教団朝鮮教区」として合同した。そ

これは朝鮮総督府の圧力の下で1943年5月、朝鮮イエス教長老会と合同し、「日本基督教朝鮮長老教団」の一つの教区になり、二重教籍を持つことになった。朝鮮イエス教長老会という教会が歴史から消える事件に日本の教会が一部の責任を担ったことである。さらに1945年7月には朝鮮総督府の主導によって、朝鮮におけるあらゆるプロテスタント教会が「日本基督教朝鮮教団」として合同した。合同後まもなく日本の敗戦により、植民地朝鮮における日本人は支配者から敗戦国民になる。本稿では、その敗戦直後の朝鮮の社会状況、宗教政策、そして朝鮮の教会の再建運動を簡単に述べ、その中で引揚げた日本人キリスト者が残した教会がどのような経緯をたどったのかを、在朝鮮日基を中心にできる限り明らかにする。

II 敗戦直後朝鮮の状況と日本人教会

1 米軍政庁の樹立と宗教政策

1945年8月6日に広島、8月9日には長崎へ原子力爆弾が投下された。ソ連は8月8日、日本に宣戦布告をし、9日に戦闘を開始した。日本政府がポツダム宣言を受諾し、降伏するという情報が8月10日には朝鮮総督府にも伝えられた。朝鮮総督府は、敗戦後の準備を急ぎ、呂運亨などの朝鮮の指導者たちと協議を進めた。8月15日日本の無条件降伏を知らせる放送があり、阿部総督は職員一同を第一会議室に集めて「⁽⁸⁾論告」を発表した。その内容は植民地支配の終焉を迎え、在朝日本人に起こり得る困難に対する憂慮を表すことだった。

朝鮮人が待ち焦がれていた独立が遂に訪れたので、町は朝鮮人の歓びで包まれた。呂運亨らは朝鮮建国準備委員会を早速発足させて、国内の治安維持を懸念したが、しかし一部の群衆は、京城府内の警察署・派出所を襲い占拠した。⁽⁹⁾新聞社、会社、工場、大商店、大学、専門学校などの機関、施設でも朝鮮人た

ちは日本人の引き渡しを求めて、実際に渡される場合もあつた。⁽¹⁰⁾長い間朝鮮民衆に対する収奪の反発が現れたのである。

朝鮮の独立は朝鮮自らの力によって直接日本帝国より勝ち取ったものではなかったことによって、朝鮮民族のさらなる悲劇が生じた。北緯38度を基準に、朝鮮半島の南部には米軍が、北部にはソ連軍が進駐してそれぞれ軍政を実施した。

ソ連軍は進駐する地域ごとに人民委員会を結成し、日本側の機関・施設や行政権を朝鮮側に移譲させる一方、他方では日本軍・警察官・行政の首脳部を抑留し、従来の日本勢力の一掃を図った。38度線以北の占領を終えたのち、各道に結成した人民委員会をまとめて、統一政権樹立の方向に進め、その政権は1945年9月に朝鮮に戻った金一成を中心に固めた。⁽¹¹⁾

米陸軍太平洋司令部司令官マッカーサーは、東京に連合国軍最高司令官司令部（G. H. Q）を設置し、朝鮮半島に対して38度線以南における軍政の実施を宣言した。米陸軍第24軍団長ホッジ（Hodge, J. R）中将与司令部、支援部隊、第7師団は9月8日仁川に上陸した。9月9日降伏文書の署名が行われ、在朝鮮米陸軍司令部軍政庁（United States Army Military Government in Korea, USAMGIK 以下、軍政庁と略する）が設置された。軍政庁は「太平洋米陸軍総司令部報告」を第1号から3号まで公布した。⁽¹²⁾それは米軍が自らの立場を朝鮮における「占領軍」として規定するものであり、朝鮮民衆にとっては日本帝国主義の支配から米軍の支配への移行だった。軍政庁は朝鮮に対する知識がなく、総督府の機構と組織をそのまま維持しようとしたが、朝鮮人の反発に遭遇して9月12日、阿部総督を解任し、アーノルド少将（Arnold, A. V）を軍政将官に任命することによって本格的な統治を開始した。ここではこの軍政庁の統治性格ではなく、その宗教政策に注目する。

上記の布告1号の前文では、「朝鮮は不日解放独立すべきものなりとの決定を考慮し、朝鮮人は占領の目的が降伏文書の条項の実行と人権および宗教の権

利の保護にあることを深く認識するものと余は確信する」とし、⁽¹³⁾ 宗教の自由、信教の自由を明確にした。それはポツダム宣言の内容でも「言論、宗教及思想ノ自由」が降伏条件の一つだったからであり、それをあらためて朝鮮においても確認したのである。

朝鮮における軍政庁は、まず宗教と民族による差別を撤廃する措置をとった。9月29日に公布された教育の措置に関する軍政法令第6号の第3条は、「朝鮮学校には種族及宗教の差別が無い」と規定した。10月9日公布された、第11号「日政法規一部改正廃棄の件」の第1条「朝鮮人民に差別及圧迫を加えるすべての政策と主義を消滅し、朝鮮人民に正義の政治と法律上均等を回復するため」の措置として、政治犯処罰法（1919年4月15日制定）を含む様々な弾圧法が廃止し、第2条では「種族、国籍、信条また政治思想の理由で差別を生じさせるもの」を廃止した。次に朝鮮における神社の撤廃が行われ、9月と10月、軍政庁条令第5条によって、「38度線以南におけるすべての神社を直接解体、焼却し、11月には各道知事に神社の焼却と所属書類および財産の差押保管を⁽¹⁴⁾命じた。しかし日本の朝鮮統治下において、宗教統制の基本法律だった「寺刹令」と「布教規則」の廃止のような措置は取られなかった。それは軍政庁が「朝鮮人の宗教上の権利保護に関心を持っていないこと」と、⁽¹⁵⁾ 積極的な宗教政策を展開していなかったことを意味する。

2 軍政庁の帰属財産処理問題

このような消極的宗教政策が生み出した分野が、日本人宗教団体が残した財産の問題である。軍政法令第2号で、日本を含めて敗戦国とそれに属する個人と団体の財産権の行使を停止させた。従ってキリスト教を含むすべての宗教団体の財産もまた随意的処分は禁じられた。

1938年の時点で、宗教団体の財産とされる布教所の数は、神道系301、仏教

系が125、キリスト教系が49だった。その中で地理的に京畿道、忠南北道、全羅南北道、慶尚南北道、つまり朝鮮半島の南部に属する地域にあったのが、神道系231、仏教系が100、キリスト教系が34⁽¹⁶⁾だった。すべての布教所が財産を持っていたのではなく、一部は家庭集会の形になっている可能性もあるが、一応大部分が宗教施設として財産を持っていたとされる。しかしその財産の行方は現在になっても明らかになっていない。ただ「軍政庁の関係の中で事案ごと」に処理されたようである⁽¹⁷⁾。

軍政庁は積極的な宗教政策は推進していないものの、キリスト教に友好的だった。ホッジは朝鮮を良く知っている人材の価値に注目し、延喜専門学校の教授で宣教師だったアンダーウッド (Underwood, H. H.) を1945年10月、そしてジェームズ・フィッシャー (Fisher, J. E.) を1946年1月に入国させた⁽¹⁸⁾。アンダーウッドは、韓国最初の長老派教会の宣教師だったアンダーウッド (Underwood, H. G.) の息子で、自らも1912年から宣教師として朝鮮で活動を始め、1942年6月朝鮮から追放されるまで至った。彼は軍政庁の顧問の身分でありながらも、戦後朝鮮に戻った最初の宣教師だった。彼は米北部長老派の宣教部への報告書の中で「人々はこの政府を『延喜専門学校政府』“Chosen Christian College government”とも呼んでいます。吾等の卒業生が影響力と権威のある地位にたくさん居るからです」と、そして解放後の朝鮮で起こっているすべての問題に自分がかかわっていることと、その中で「日本人の教会と学校の財産処理問題」にも関与していると報告した⁽¹⁹⁾。

アンダーウッドが、日本人教会や宗教施設の財産の処理に、具体的にどのように関わったかに関する記録はこれ以上見つからないが、そのやり方が主に朝鮮人キリスト者に友好的に動いたと推察することは自然だろう。

軍政庁の親キリスト教的性格は、軍政庁の設置直後に委嘱した朝鮮人行政顧問からも窺える。全11名の顧問の中で、6名がキリスト者で3名は牧師だった。軍政庁はあえてキリスト者を選抜したわけではなく、アメリカや日本留学の経

験者として専門分野の知識を持ちながら英語ができる人で、理想的には、反共主義を標榜する保守的な韓国民主党系の人士が軍政庁の支配論理に適切だったこと⁽²⁰⁾にあった。

その上、朝鮮人が日本人との財産の取引が法律的に保障された。敗戦国などの財産権に関する軍政法令第2号によると、宗教施設は日本政府との直接的な関係のないものとして取引の可能性があり、また軍政庁の財産管理局の認可があれば可能だった。10月11日には「日本人財産売買に関する譲渡手続き」が発表され、米軍政庁の規定に従い、正当な価額が支払われると、朝鮮人による日本人財産の購入が可能⁽²¹⁾になった。

同年の1945年12月6日軍政庁は、「朝鮮内所在日本人財産権取得に関する件」の軍政法令第33号を公布した。この法令は朝鮮内の日本人所有の莫大な財産を一気に軍政庁に帰属させるものだった。その規模は1945年8月を基準として\$2,275,535,422⁽²²⁾で、それは朝鮮半島南部の総資産の約70~80%と推定された⁽²³⁾。敵が残したということで「敵産」、あるいは帰属されたことで「帰属財産」とも呼ばれたこの財産は、大韓民国政府樹立以後、1948年9月11日に「大韓民国政府及米国政府の間の財政及び財産に関する最初協定」によって韓国政府に移譲された。

要するに後に述べる在朝日本人教会の引き継ぎは、アンダーウッドと朝鮮人官僚などの軍政庁内部のキリスト者の影響によって、帰属財産に関する軍政庁の法律的な根拠に基づいて行われたと判断される。

3 在朝日本人教会の状況

敗戦直後、在朝鮮日本人教会の状況を描く鮮明な報告があった。それはほぼ⁽²⁴⁾唯一の報告で、そのまま紹介する。

朝鮮の混亂の事実が報道せられると共に種々の噂が伝へられ、殊に教会や信徒の事情に就て教団の一同深く苦慮しつゝ所であるが、京城旭町教会牧師宇賀正實氏から本教団に寄せた報告に由ると左の如くである。(原文のまゝ)

前略八月十五日休戦の聖断下りこゝに朝鮮の新政権樹立準備で大混亂です。この間に乘じ種々な運動や流言です。不安に邦人は追ひこめられましたが、軍の警備に依り全く平静に帰しつゝあります。昨日本引上げで大変です。家財は二足三文で売られ、之を買ふ朝鮮人で目も当てられません。当地の布教は新政樹立後でない明瞭になりませんが、現状は

- 一、どこも引上げ邦人信徒可なり多く経営至難に陥りませう。
- 二、或る教会は休止状態になり、無牧になりませう。
- 三、従つて九月以降中央負担金を納入し得ない教会も出ます。又本部から非常措置(戦災教会と同じく)を講ずる要が生じます。御考慮を乞ふ。
- 四、小生ら夫婦は最後まで踏み止まります。(八月廿一日発信)

第二信

新日本建設の為日々御尽瘁のことと存じます。祖国の危局に直面し、異境にあつて一入感慨無量なものがあります。日本との通信も殆どとだえ、不便を感じますが(註、此の郵便物は幸便に托して下関で投函されている)三十八度以北と以南とは全く交通、通信とも杜絶し、別世界となりました。当分北鮮の教会とは連絡が取れませんが、次第に調整されるにつれて連絡が取れると希望をもつています。さて北鮮、西鮮の我が教会は凡て戦災を受けていますが、特に

清津教会 空襲に依り焼失(確定)

羅南教会 同じく焼失せるものの

如し

其の他羅津、城津、會寧、咸興、元山等、何れも大打撃を受け、信徒も

避難し、四散の現状です。教師森田恒一、高田勝代南氏に対し戦災者として至急物的援助を願ひます。また笠井昌雄氏（海州）も応召して清津に居りましたが行方が案じられます（九月廿四日付、下関消印九月三十日）。

在朝鮮日本人教会も敗戦を準備していなかった。予期し得ない状況に置かれて大混乱を経験していた。ここで第一信と第二信に相違が見える。第一信の時期でも、朝鮮からの完全撤収が前提になっていなかった。教会の営みは非常に困難な状況にも拘らず、「負担金」の納入を心配しているし、宇留賀本人も最後まで残る決意を見せた。ある意味では使命感が強いとも言えるが、他の意味では敗戦が自分の身の周りに及んでおらず、また教会の存続にとって何を意味するのかについて具体的な認識がなかったとも言えよう。しかし第二信になると、朝鮮教区が受けた被害の規模が知らされた。羅津、雄基、清津の教会がソ連軍の爆撃をうけるなど、戦闘が行われた地域の教会の被害が多かったことを伝えている。共産主義が圧倒した朝鮮北部地域の日本人教会は生き残ることができなかったことが知らされている。

III 在朝鮮日基教会の行方とその後

1 朝鮮教会の再建運動

36年に及ぶ植民地支配の末、朝鮮教会は深刻な打撃を受けていた。多くの教会が閉鎖され、存続した教会でも週一回以上の集会は許されなかった。教会の指導者たちは日帝からの迫害と圧力で苦しんで、多くの信徒が教会から追い出された。⁽²⁵⁾ そのような日帝の支配から解放を迎えた朝鮮の教会は、その解放と同時に強制的な南北分断という不幸な局面に直面した。ここでは、朝鮮半島における日本人教会の引き続きの背景になる朝鮮の教会の再建運動を、長老派教会

を中心に簡単に考察する。

(1) 朝鮮半島北部における教会再建運動

15年戦争期の厳しい統制の中で朝鮮の教会は、神社参拝反対による迫害、戦時下総動員体制の下で活動の萎縮、教勢の減少を経験した。解放直後、朝鮮北部の平東老会長をつとめた金良善は、解放直前の教勢は最盛期の半分にまで減少したと評価した。⁽²⁶⁾

ところが朝鮮の教会における最優先の急務は、教勢の回復だけでなく植民地支配下神社参拝などで損なわれ、組織においては「日本基督教朝鮮教団」として強制統合された教会の再建だった。そして相対的に神社参拝反対闘争に積極的だった朝鮮の北部の場合は、反対闘争によって投獄された後、解放と同時に釈放されたいわゆる「出獄聖徒」と、神社参拝に屈従しながら教会を指導した指導者の両グループの間で深刻な葛藤があった。出獄聖徒側は、神社参拝に参加した教会の指導者たちに対して全面的な悔い改めと謹慎を求めたが、彼らは自分たちも「教会を守る苦労をした」と抗弁し、その要求に応じなかった。⁽²⁷⁾そして、神社参拝の責任の問題は本格的に問われず、当時より緊迫な問題だった共産主義勢力の拡張への取り組みのため共同戦線を作ることになったといえる。⁽²⁸⁾その結果登場したのが「以北五道聯合老会（以下、聯合老会）」だった。聯合老会は、強力に伝道運動を推進する一方、他方では米軍が占領した朝鮮半島南部の教会との紐帯を持続するために努力し、共産主義勢力から自らを守るために政治運動も展開した。⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾

このような教会の再建運動にもかかわらず、強まっていく共産主義勢力と比べてキリスト教の影響力は微々たるものだった。1948年8月、最高人民会議の代議員選挙が実施されて、9月9日、社会主義憲法を採択した朝鮮民主主義人民共和国が樹立された。このような状況の中で共産主義政権は、教会へ弾圧を

加えた⁽³¹⁾。多くのキリスト者は宗教、政治、経済的な理由で越南した。解放直後には、カトリックとプロテスタントを合わせて2千以上の教会、2千名以上の教師と聖職者、30～35万の信徒があったが、1949年には信徒が20万まで減少した⁽³²⁾。北部地域のキリスト者は、共産主義政権と対決するか、あるいは1946年11月28日に組織された「北朝鮮基督教徒聯盟」に加入するかの選択肢しかなかった。1950年6月25日の朝鮮戦争前まで、同連盟に加入しない教職者は投獄され、その礼拝堂は閉鎖された⁽³³⁾。こうすることで解放後の北部地域教会の再建運動の終焉を告げた。

(2) 朝鮮半島南部における教会再建運動

解放直後、米軍が進駐した南部地域の状況は北部とは異なり、植民地政府の抑圧に抵抗した人々が少なく、むしろ戦時末期生まれた日本基督教朝鮮教団の存続を希望する者もいた。それは、新しい体制の中では一つの教団としてまとめられた方がキリスト教の影響をより効果的に発揮できるとの判断があったからだ⁽³⁴⁾。

教団の指導者たちは早速「日本基督教朝鮮教団」の名称を「朝鮮基督教団」と変更し、1945年9月8日、新門内教会堂で「南部大会」を招集したが、集まったのは長老教会と監理教会の代表だけで、しかも監理教会の代表は、会議の開始と同時に、監理教会の再建を宣言して退場した。そして1945年11月27～30日、貞洞第一教会堂において実質的な南部大会が開催された。役員を選出して、殉教者に対する追悼といくつかの決議がなされた⁽³⁵⁾。地方の長老教会は続々と老会を再建した。1945年12月3日、釜山を中心に慶南老会の開会、12月5日、全州西門外教会における全北老会の開会など次々と老会が組織・再建され⁽³⁶⁾、1946年初頃までには朝鮮半島南部地域における長老会教会の老会再建は完結した。1946年4月30日～5月2日、第2次南部大会が開かれたが、参席者は「各教派

はそれぞれの性格通り活動する」ことを決議して、結果的に南部大会の解体のための会議になってしまった。⁽³⁸⁾

1946年6月11～13日、ソウルの勝洞長老教会で第一次「南部総会」が開かれ、第27回総会で行われた神社参拝決議を取り消したが、その責任は問われなかった。1947年4月18日、大邱第一教会堂で「朝鮮イエス教長老会第33回総会の開会」が宣言された。⁽³⁹⁾それは1941年の第31回総会の継承を明確にし、1943年成立した日本基督教朝鮮長老教団および1945年成立した日本基督教朝鮮教団を否定し、その歴史と切り離す措置だった。前年度の「南部総会」が第32回総会として認められた。この33回総会でも歴史的な反省は見当たらない。

それは当時の社会の情勢において、植民地時代に活躍したいわゆる親日派人事が、米軍政府と李承晩により認められ再任されたためである。朝鮮統治に対する準備も知識もなかった米軍政府は、円滑な統治のために行政、治安の経験がある植民地時代の朝鮮人官僚、警察をほとんど再任した。1948年9月22日、反民族行為処罰法が制定され、それによって反民族行為処罰特別委員会が設置され、反民族行為者に対する調査、検挙活動が展開された。⁽⁴⁰⁾しかし当時権力を握っていた親日派系の警察の攻撃、親日派を支持基盤とした李承晩などの妨害工作によって、期待された成果をあげることができず、1949年8月、活動を終えることを余儀なくされた。⁽⁴¹⁾多数のキリスト教指導者も検挙され、審問を受けたが、その委員会の解体と共に起訴猶予処分を受けた。⁽⁴²⁾韓国の教会は、取り組むべき歴史的な課題に取り組みず、再建を急いだという歴史的、神学的問題を抱えていたと言える。

2 日本人教会の引き続き

とりあえず指摘しなければならない問題は、教会とは何か？どのような意味で教会の引き継ぎを語るができるだろうかということである。そもそもキ

リスト教において教会に対するもっとも古い概念は「神の民」である。⁽⁴³⁾つまり教会とは建物ではなく人々、すなわち共同体を意味することである。その意味で1946年2月頃朝鮮半島の南部における日本人の引揚げがほぼ完了した時点で、日本人教会は消滅したと言っても過言ではない。しかしその共同体が信仰の共同体であって、ある信仰の共同体の信仰生活の場が、同じ宗教の信仰を持つ他の共同体に引き継がれ、彼らの信仰生活の場として使われるとしたら、ある程度の意味で「教会」は引き継がれたと言えるのではないか。信仰生活の場の引き継ぎとして日本人教会が朝鮮人教会によって活用される場合、本稿では「教会の引き継ぎ」あるいは「教会の引き受け」として表現する。

(1) 礼拝堂と牧師館の受託書

植民地朝鮮の日本人教会が解放された朝鮮人キリスト者にどのような背景で引き継がれたのかを検討したが、その具体的な証拠は今まで確認できなかった。そこで、元日本組合大邱教会の礼拝堂と牧師館を引き受けて教会を拡張し、現在大韓イエス教長老会大邱鳳山教会がインターネット上で公開した『鳳山教会70年史：1945～2015』にその証拠が紹介された。その内容は次のようである。⁽⁴⁴⁾

受託書

一、大邱不南龍岡町四拾六番地ノ壹

壹

壹

壹 壹百參拾七坪四合

一、全 五拾參番地ノ六

壹 拾五坪

一、全 五拾参番地ノ七

 垓 壹坪

一、全 五拾参番地ノ九

 垓 七坪

一、全 地上

 教会建物一階参拾貳坪五合、二階拾坪

 牧師館 拾七坪貳合五

右付属品一切と共ニ朝鮮新政府若ハ軍政ガ処理スル時迄当教会トシテ使用
スル様ニ左記条件ヲ付委託相成リ正ニ受託候也

記

一、右建物ノ修繕ハ当教会ニ於テ之ヲ為スコト

二、右土地建物ニ対スル公課其他ノ費用ハ当教会ニ於テ負担スルコト

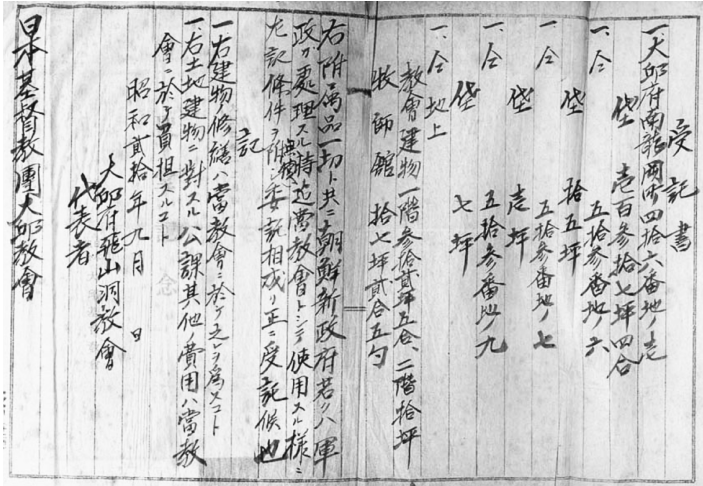
昭和貳拾年九月 日

大邱府飛山洞教会

代表者

日本基督教団大邱教会

この受託書の内容から確認できることは3つである。第1は、受託される土地の住所と面積、そして礼拝堂と牧師館など建物の内容が具体的に記されている。第2は、その受託が無償で行われたことである。礼拝堂の修理及び公課、つまり申告、土地の登録などに必要とされる一切に費用の負担もしないものの、土地、建物、その他の付属品に関する代価も請求していないことがわかる。第3は、これがあくまでも「朝鮮新政府若ハ軍政ガ処理スル時迄」という条件付きの「受託」するものということである。つまり永続的に使えるように完全に譲り渡したのではなく、一時的に預かる形だったのである。これを以ってこの



수탁서(1945년 9월 28일)

図1 大邱飛山洞教会から日本基督教団大邱教会への受託書

「受託」という形式が、日本人教会が朝鮮側に渡される一般的な形とは限らない。後述するが、引揚げが決まった日本人キリスト者から礼拝堂などを引き受けた朝鮮人たちはそれを永続的なこととして認識している。ただ、この大邱教会の場合、「受託」の形になったのは「大邱府飛山洞教会」の「代表者」となる崔正元牧師に原因があると考えられる。後述するが、在朝日本人教会は、主に日本人キリスト者とある程度関わりがある朝鮮人キリスト者に引き継がれた。しかし、『鳳山教会70年史』で紹介されている崔正元は1912年生まれで、朝鮮耶蘇教東洋宣教会聖潔教会の牧師だった。⁽⁴⁵⁾ 朝鮮では、「聖潔教会」として知られていたこの教会は1943年、日本のホーリネス系教会と同じく解散を余儀なくされ、正式に教団が再建されるのは1946年4月である。1945年9月の時点であつて朝鮮聖潔教会の牧師崔正元に教会の財産を譲り渡すには無理があつて代わりに条件付きの「受託」の形になったと推測される。それから米軍による軍政の実施以降も礼拝堂と土地はそのまま飛山洞教会によって使われたと考えられ

る。

(2) 日本基督教会系の教会

ア 京城教会

京城教会は、日本基督教団の設立と共に日本基督教団朝鮮教区京城貞洞教会に名称が変更され、貞洞第一教会として朝鮮人の間で知られていた⁽⁴⁶⁾。朝鮮イエス教長老会安洞教会の牧師だった崔巨徳は、朝鮮の解放直後、同教会の長老と執事などの役員と共に40日の自粛の時間を持った。植民地支配の下で行った親日行動を懺悔する主旨だった⁽⁴⁷⁾。崔巨徳は、積極的な親日活動には関わらなかったが、1938年朝鮮基督教聯合会の設立の際、平議員の一人でもあり、また彼が設立理事として務めた朝鮮神学院は、「本学院ハ福音的信仰ニ基ヅク基督教神学ヲ研究シ忠良有為ナル皇国ノ基督教教役者ヲ養成スルヲ目的」とすると明記した上で総督府の認可を受けた歴史があった⁽⁴⁸⁾。崔巨徳は、新しい教会開拓のため京城貞洞教会の引継ぎを試み、村岸清彦牧師と長老の花村美樹、京城帝国大学法文学部教授と交渉をした⁽⁴⁹⁾。しかし解放直後のソウル中心部に建てられた立派な礼拝堂を利用して教会再建の試みか、あるいは新たな開拓を図ろうとする人々が多かったと推測するのは難しくない。その中で最も有力なのは金鍾大牧師だった⁽⁵⁰⁾。金鍾大は、1943年の日本基督教朝鮮長老教団の設立の際総務として働き、1945年日本基督教朝鮮教団の設立の際には教団書記として責任を担った。したがってそれらの教団の設立の際、日本側の中心的な人物だった村岸と金鍾大は共に働き、二人は親密な関係を形成したようである。このような経緯で村岸から京城貞洞教会を引き受けたのは金鍾大であった⁽⁵²⁾。

金鍾大は引き継いだ京城貞洞教会の礼拝堂と牧師館を基として「光化門教会」を創立したが、信徒が皆無であり、礼拝堂の建物を管理するのみであった。その状況を聞いた崔巨徳は安洞教会を辞任して京城貞洞教会の礼拝堂から開拓

伝道を開始したのである。⁽⁵³⁾

金鍾大は、植民地期、積極的な親日活动によって朝鮮長老教会の重要なポストに就くことができた。総会内の政治力に強い人だと判断できる。まだ若い頃、全北老会長を経て、前述したように長老教会の変容に積極的に加担し、1945年解放直後にも朝鮮神学院の理事長まで歴任した。朝鮮神学院の設立は1940年の第29回総会で可決されたが、実際に授業が始まったのは1943年で、京城の勝洞教会においてだった。一時的には松本卓夫も朝鮮神学院の理事長として務めた。⁽⁵⁴⁾そこには村岸、花村、山口重太郎、宮内彰などの在朝日基出身の牧師、長老が教授として教えていた。⁽⁵⁵⁾このような朝鮮神学院の理事長になったのも、日本人キリスト者との近い関係が大きな影響があったからであろう。

崔巨徳は、1946年2月、旧京城貞洞教会の土地260坪と建坪192坪の礼拝堂と牧師館を引き受けた。崔巨徳は尹ダンヨルという青年に礼拝堂とそこにあるすべての備品、図書を管理させたが、⁽⁵⁶⁾当時の図書の資料で今まで残されたものはない。1946年4月、崔巨徳が牧師館に入居する際、綺麗に片付けられて図書などは何もなかったそうである。⁽⁵⁷⁾1946年3月10日、いよいよ徳寿教会の創立礼拝があった。教会の名称は、教会の隣の徳寿宮と徳寿国民学校から名付けた。徳寿教会は現在、大韓イエス教長老会（統合側）の有力な教会として伝道が続けている。1983年、行政の都心再開発の影響で、礼拝堂を移転しなければならなかった。城北洞に新しい礼拝堂を建築して、1985年11月10日、献堂礼拝が捧げられ、旧礼拝堂は撤去された。

徳寿教会は新礼拝堂の建築の際にも、貞洞の旧礼拝堂の様式の多くを参考にした。教会の信徒が旧礼拝堂をととも大事にしていたので、新礼拝堂との連続性を保とうとしたのである。⁽⁵⁸⁾また新礼拝堂には歴史資料室もあって、京城貞洞教会の時代から使っていた講壇やピアノも展示されている。植民地時代の礼拝堂を引継いだのが、それを教会の歴史の一部として認めつつ、より未来志向的に受け入れたのは高く評価すべきであろう。

イ 若草町教会

現在ソウルにある韓国キリスト教長老会所属の草洞教会は、その始まりに対して次のように述べている。「1945年8月15日、祖国の解放と共に今日の草洞教会は、その当時日本人が礼拝を捧げていた若草町教会を金鍾大と劉載奇、二人の牧師が引き受けて宋台用牧師と鄭薫執事、徐廷翰執事のその他4、5人から始まって、初代堂会長咸台永牧師を迎え朝鮮イエス教長老会草洞教会として発足した。⁽⁵⁹⁾」

ここで先ず、若草町教会を引き継いだ人が、貞洞教会と同じく金鍾大であったことを指摘しておきたい。そこから金鍾大は少なくともソウルにおける日本人教会の処理問題に深く関わっていたことがわかる。劉載奇は日本大学専門部社会科を中退、1929年平壤長老会神学校に入学、34年卒業した。彼は独立運動にも関わって1939年有罪判決を受け、1年間服役したが、1941年7月国民総力朝鮮イエス教長老会慶北老会連盟理事長として積極的な親日および戦争協力活動に携わった。解放後にはソウルに上京して日本人が経営していた劇場、旅館などを引き受けて興国ホテルを営んだ。解放後には教会の牧会にはほとんど携わらずに、主に商業、産業活動に従事した。⁽⁶⁰⁾おそらく日本人が残した教会の財産であった若草町教会を金鍾大と劉載奇が引き受けて、開拓伝道を希望していた宋台容とその他の信徒に何らかの形で提供したとされる。

1945年10月、京畿老会より草洞教会は教会設立の認可を受けたとしているが、⁽⁶¹⁾この時期にはまだ公式的な京畿老会の結成はできていない。ただ朝鮮基督教団の一つの教区として教務は続けたと推測するしかできない。草洞教会の朝鮮人信徒が引き受けた財産は、若草町104番地所在の土地75坪、建坪32坪の木造礼拝堂、木造2階建ての牧師館、4人用の長椅子55個、3人用椅子16個、ドイツ製のピアノとオルガン各1個だった。⁽⁶²⁾京畿老会の設立認可の下で咸台永牧師を堂会長にして約90人が集まり、草洞教会が創立された。⁽⁶³⁾しかし咸台永は形式的な堂会長であって、礼拝の説教は宋台用が担当した。

草洞教会の歴史において注目すべきなのは、1954年12月、第3代主任牧師になった趙香祿牧師の時代に結ばれ、続けられた日本キリスト教団青山教会との協力関係である。これについては次の節に述べる。

ウ 龍山伝道所

龍山伝道所は、日基が早い時期に開拓した伝道所でもあったが、1925年の乙丑年大洪水によって、教会が莫大な損失を被って公式的には京城教会に併合されることになった。しかし集会所として存続し、ある程度の機能はしていたようである。なぜなら龍山伝道所の集会所が敵産として引き継がれ、もう一つの朝鮮の教会の拠り所になったからである。1942年から朝鮮イエス教長老会の龍山教会の主任牧師だった兪虎濬牧師は、1945年10月、漢江路2街80番地の、日本人教会に属している1階建ての木造建物つまり龍山伝道所の建物を引き受けて開拓伝道を始めた。1945年10月7日がその最初の礼拝だった。そこで兪虎濬と龍山教会は、黄善伊⁽⁶⁴⁾牧師を派遣し、1946年3月24日、「三角教会」という長老会⁽⁶⁵⁾教会が創立された。今は大韓イエス教長老会（統合側）の教会として存在している。

兪虎濬は、1945年日本基督教朝鮮教団の創立の際、書記に就いた⁽⁶⁶⁾。そのような立場にあったので、日本人キリスト者と親しく、龍山伝道所に関する情報も手に入れ易かったので、当時龍山伝道所の実質的な責任を持っていたはずの村岸から礼拝堂を引き受けることができた⁽⁶⁶⁾と推察できる。

エ 釜山日本基督教会

釜山日本基督教会は、尹仁駒牧師によって引き継がれた⁽⁶⁷⁾。尹仁駒は、1926年明治学院神学部を卒業、アメリカとイギリスに留学後、1931年帰国と同時に晋州長老教会に赴任、1935年馬山福音農業実修学校の校長として就任した。同学校に在職中、朝鮮の日基教会を中心に巡回伝道中であつた川添萬壽得を招き、

同学校で講演会を開いた。川添は尹仁駒を明治学院中学時代から知っていたので、親しい感じで詳しく尹仁駒と同学校を紹介している。⁽⁶⁸⁾尹仁駒は明治学院出身として、日基は彼の状況と活動を『福音新報』から何度か紹介している。⁽⁶⁹⁾そして馬山福音農業実修学校を辞任してからは京城に上京、朝鮮神学院の理事および教授として活動することによって在朝鮮日本人牧師などとはより深い関係を作ることができたとされる。1944年朝鮮神学院の仕事を辞めて、故郷に戻り関木の仕事に携わっている内に解放を迎えた。彼が米軍政庁の慶尚南道内務部学務課長になり、日基の釜山教会を引き受けることになったのは、このように日本人との親しい関係、そしてアメリカとイギリス留学の学歴と教育者としての経験が豊かにあったからであろう。尹仁駒は唐牛正から釜山教会の礼拝堂を引継ぎ、1945年11月25日「光復教会」を創立した。彼の経歴のせいか日本、満州などの国内外の各地方から釜山に来ていた信徒が集まり、教会を組織した。⁽⁷⁰⁾光復教会の元の礼拝堂は1972年2月の火事で焼失してしまい、しばらく間牧師館で集会を続けた。1973年1月、新礼拝堂を建築して現在まで至っている。⁽⁷¹⁾

オ 群山日本基督教会

19世紀末、群山最初の教会の龜岩教会が設立された以来1905年開福洞教会が開かれ、1926年開福洞教会から新興町教会が設立された。⁽⁷²⁾新興町教会は1943年政府から弾圧を受け一時閉鎖されたが、1945年8月15日の光復と共に復興され、1945年11月当時永和町15-11に所在した群山日本基督教会礼拝堂を引き受け、教会名を新興町教会から群山新興教会に改称した。⁽⁷³⁾群山新興教会では礼拝堂の移転の歴史に関する資料が残っていないし、教会の歴史書もまとめられていない。ただ1960年代と推定される写真から昔の礼拝堂の形を窺うことができる。教会の沿革に「1972年3月、日本のキリスト者オホグラヨネシ(ママ)来訪する」という記述があるが、その件に関して記憶する信徒はいなかった。それは、群山日本基督教会の創立者の一人となる大倉米吉の子孫として推測されるが正確⁽⁷⁴⁾

な名前を把握することは不可能である。

カ 大邱日本基督教会

申泰植⁽⁷⁵⁾は東北帝国大学を卒業後、母校の啓聖中学校で英語を教えた。大邱日
基教会の牧師佐藤新五郎も啓聖学校で英語を教えていたので、二人は親しい関
係を作っていた。敗戦直後、申泰植は個人的にある程度の金額を大邱教会と佐
藤に払い、礼拝堂と牧師館を引き受けた。牧師館に申泰植の兄申厚植が住むよ
うになり、申泰植はその礼拝堂を自分が校長に就任した啓聖学校の学生のため
に使っていたのである。そこで李命錫牧師の提言があって、医者⁽⁷⁶⁾の孫仁植と共
にその礼拝堂から教会を創立することにした。40名の設立委員会が教会創立の
ために集まり、申泰植と孫仁植、二人の名義で教会創立の招待状を発送した。
そして1946年1月6日の新年の第一日曜日に設立礼拝が行われた。礼拝後、教
会の名称は東門路という地域名に従い「東門教会」に決定、そして堂会長に金
泰黙⁽⁷⁶⁾牧師、担任教役者に李如眞⁽⁷⁷⁾牧師、教会業務・行政に関しては申泰植に委任
した。そして金泰黙⁽⁷⁸⁾は多様な経歴を持っているものの、解放後には米軍政庁の
官吏として働いていた。

さて申泰植の兄の申厚植⁽⁷⁹⁾は1939年から啓聖学校の校牧に、1943年の日本基督
教朝鮮長老教団の設立以後は慶北教区長になり、1944年5月には大邱基督教戦
時報国会の副委員長、1945年8月日本基督教朝鮮教団の設立の際には、また慶
北教区長を務めた。申厚植は1956年7月1日、鐘路教会を創立したが教会の伝
道はうまく進まず、東門教会との協議が行われ両教会の合同が決まり1971年1
月3日、東門の「東」と鐘路の「路」の名を合わせた「東路教会」が創立され
た。⁽⁸⁰⁾大邱の長老会教界に根を下し、日本人キリスト者と深い関係を結んでいた
キリスト者、アメリカとの関係も持っていたキリスト者によって、大邱の日基
教会堂が引き継がれ、新しい教会の礎になった。

(3) 他教派の在朝日本人教会

ア 京城メソヂスト教会

京城メソヂスト教会は、日本基督教団の創立後からは、教会があった住所の京城府旭町2-2によって「京城旭町教会」として名付けられた。李奎甲牧師は、1945年11月30日、京城旭町教会の礼拝堂を引き受け、12月2日南山教会を設立した。1946年10月30日、米軍政庁の人事行政処長だった鄭一亨の協力で正式に財産の登録が完了した⁽⁸¹⁾。旭町教会堂を引き受けたのは独立運動家の李奎甲⁽⁸²⁾としているが、最初に就任したのは金仁泳牧師だった。金仁泳は1946年6月まで働き、そして朴淵瑞牧師が1948年5月まで牧会した。問題は、李奎甲と金仁泳及び朴淵瑞はその歩んだ道が正反対の人物だったことである。李奎甲は活発な独立運動を展開し、36回以上の投獄と出獄を繰り返したが、金仁泳と朴淵瑞は『親日人名事典』に掲載されるほど、積極的な親日行動を行った。その問題に関しては、『南山教会50年史』の中でも、明確に記述していないし、編纂委員長も創立に関する明確な資料がないことを指摘している。

金仁泳は1938年5月、朝鮮基督教連合会平議員として参加した以降、戦時期朝鮮の監理教会の様々な要職に就いて戦争に協力し、日本的キリスト教の提唱の先駆的人物だった。朴淵瑞も一時期独立運動を展開して、1920年12月から2年間服役したことがあったが、1930年代後半からは総督府の植民地支配に協力する講演家、言論人として積極的に活動した。そのような状況から詳しい過程までは把握できないものの、同じメソヂスト教会の牧師として深い関わりがあった金仁泳は、京城メソヂスト教会の牧師だった宇留賀政実から礼拝堂を引き受け、李奎甲の協力によって、南山教会を創立したのである。金仁泳に続いて朴淵瑞がしばらくの間、牧会を続けたと判断できる。1948年12月からは李奎甲が改めて就任し、1950年3月まで牧会を行ったが、1950年3月からは卞鴻圭牧師が1967年2月まで教会を担当した。卞鴻圭は1942年12月監理教会統理者とし

て選出され、日帝の戦時政策への協力を呼びかけ、1945年7月には日本基督教朝鮮教団の教学局長に任命された経歴を持つ。解放後には監理教会の再建に尽力し、監理教会を代表する神学者として業績を残した。⁽⁸⁵⁾

イ 京城組合教会

京城組合教会は日本基督教団の合同後、京城米倉町教会になった。1945年11月、米倉町教会の最後の牧師櫻井乾一郎と信徒の送別会があって、牧師と信徒は皆日本に引き揚げた。⁽⁸⁶⁾京城米倉町教会の礼拝堂を引き受けたのは、全仁善牧師と池東方氏だった。1945年9月26日頭初は池東方氏自宅で、そして10月3日には全仁善牧師自宅で何人かの信徒が集まって礼拝をした。10月10日には、解放後の住所でソウル市中区南倉洞10番地所在の礼拝堂で「ソウル教会」という名称で教会を創立した。⁽⁸⁷⁾全仁善は日本基督教朝鮮教団の設立に大きな役割を果たした。神戸中央神学校と京都帝国大学で修学し、在日本朝鮮基督教会の京都教会（1939～1940年）、大阪教会（1942.2～1944.11）で伝道したが、大阪教会の時代は日本基督教団に属していたので、所属上は教団の牧師であったと言える。日本の教会との深いつながりで当時京城旭町教会に続く、第2番目の規模の米倉町礼拝堂を引き受けることができたと推測される。礼拝堂は朝鮮戦争中爆撃によって一部破壊され、全仁善は1950年9月19日、北朝鮮軍に逮捕されて西大門刑務所で死去した。1953年5月ソウルに戻った信徒たちは礼拝堂を修理して使ったが、都市計画によって教会の土地の真ん中に道路が開設されてしまい、礼拝堂の移転を余儀なくされた。⁽⁸⁸⁾現在では旧礼拝堂はもちろんソウル市中区南倉洞10番地という住所自体が存在しない。教会名称をソウル教会から「漢陽教会」に変更し、1955年に再度礼拝堂を移転したが、1956年火事ですべてが焼失し、資料として残っているのは皆無である。⁽⁸⁹⁾

ウ 仁川メソヂスト教会

日本基督教団仁川教会、仁川メソヂスト教会の最後の教師は泉琉江だった。⁽⁹⁰⁾ 1944年着任して、わずか1年後、1945年11月引き揚げることになった。その礼拝堂を引き継いだのは朝鮮の聖潔教会系教会、仁川の松峴教会だった。現在の松峴聖潔教会である。1930年創立の松峴教会は、引き継いだ礼拝堂に教会の元創立会員だった鄭三善牧師、柳ジンウ長老など70名を派遣して1945年11月、教会を創立した。⁽⁹¹⁾ その名称を『仁川市史』では、「大韓キリスト教会」(ママ)と記しているが、正式な名称は定かではない。1946年ソウルの永楽長老教会は韓秉赫牧師を仁川に派遣して、朝鮮半島北部から越南した信徒たちの集会から長老教会の設立を試み、1946年10月19日、仁川第一教会の創立礼拝が行われた。約50名の信徒がいた。仁川第一教会は頭初に信徒の自宅で集会をしたが、「大韓キリスト教会」側が礼拝堂の提供と教会の合同を提案し、この提案を仁川第一教会側が受け入れ、同年11月16日、旧仁川メソヂスト教会の礼拝堂で両教会の信徒100余名が集まり、合同礼拝を捧げ、大韓イエス教長老会(ママ)仁川第一教会と称した。⁽⁹²⁾ ただ、仁川メソヂスト教会礼拝堂を引き受けた過程とその中心人物だった鄭三善、柳ジンウに関しては、伝道開始以来1933年松峴教会の礼拝堂を新築した事実以外には何も知られていない。⁽⁹³⁾

エ その他の教会

釜山メソヂスト教会の礼拝堂は盧震鉉牧師が引き受けて、現在の大韓イエス教長老会(合同側)釜山中央教会を開拓した。釜山中央教会は1945年12月2日、創立礼拝を行い現在に至る。⁽⁹⁴⁾ 大邱メソヂスト教会は1923年創立された大邱の中部教会の新たな出発の礎石になった。⁽⁹⁵⁾ 中部教会は日帝末期、教会の集会が妨げられ信徒が散らされていたが、1945年10月日本人メソヂスト教会の礼拝堂を引き継ぎ、11月2日に新礼拝堂で最初の礼拝を行った。⁽⁹⁶⁾ 現在の韓国基督教長老会所属の教会である。大邱組合教会の礼拝堂は、上記の資料「受託書」に記され

たように、飛山洞教会に譲渡された。飛山洞教会は崔正元牧師が開拓した、聖潔教会系の教会だった。礼拝堂を引き受けたから公平洞教会と名称を変更した。1967年大韓イエス教長老会（統合側）に加入することによって「鳳山洞教会」に再び名称が変わり、1988年以来大韓イエス教長老会（統合側）「鳳山教会」として存続している⁽⁹⁷⁾。以上の教会については、礼拝堂の引継ぎの経緯に関する詳しい内容は現在知ることができない。

今までの内容をまとめたら次のような表になる。

表1 在朝日本人教会の行方

元教派	教会	新教会名	主な引受人	引受人の日本と関わる履歴
日基	京城貞洞	大韓イエス教長老会 徳寿教会(統)	金鍾大	日本基督教朝鮮長老教団の設立の際、総務として活動。日本基督教朝鮮教団の設立の会議書記。解放直後朝鮮神学院理事長など。
			崔巨徳	日本大学宗教学科卒業。朝鮮基督教聯合会の平議員。
	京城若草町	韓国基督教長老会草洞教会	金鍾大	
			劉載奇	日本大学専門部社会科中退。独立運動にも関わって1939年有罪判決を受け、1年間服役したが、転向し国民総力朝鮮イエス教長老会慶北老会連盟理事長などの親日、戦争協力活動。
			咸台永	独立運動家、朝鮮神学院の設立に関与。
	龍山伝道所	大韓イエス教長老会 三角教会(統)	兪虎溶	日本基督教朝鮮教団書記
			黄善伊	神戸中央神学校を卒業。在日本朝鮮基督教会京都南部教会牧師。
	釜山	大韓イエス教長老会 光復教会(統)	尹仁駒	明治学院神学部卒業。神学生時代に釜山教会所属。プリンストンとイギリスのエディンバラで神学修学。馬山福音農業実修学校校長、朝鮮神学院校長歴任。
	大邱東城町	大韓イエス教長老会 東路教会(統)	申泰植	日本の東北帝国大学卒業。啓聖中学校校長、啓明基督大学学長。
			申厚植	日本基督教朝鮮長老教団の設立以後は慶北教区長になり、1944年5月には大邱基督教戦時報国会の副委員長、1945年8月日本基督教朝鮮教団の設立の際には、慶北教区長。
群山	大韓イエス教長老会 新興教会(統)	?		

戦後朝鮮半島における日本人教会

メソヂスト	京城旭町	基督教大韓監理会南山教会	李奎甲	独立運動家、解放まで36回の投獄と出獄を繰り返す。
			金仁泳	朝鮮基督教連合会平議員、国民総力基督教朝鮮監理会連盟文化部長、「純日本の神学校」として再び開校された監理教神学校の校長となり、1943年日本基督教朝鮮監理教団事務局長と教師修練所長。
	仁川	大韓イエス教長老会仁川第一教会(統)	松峴 聖潔教会	
	釜山大廳町	大韓イエス教長老会釜山中央教会(合)	盧震鉉	神戸中央神学校卒、在日本朝鮮基督教会大阪西成教会牧師。
	大邱龍岡	韓国基督教長老会中部教会	東雲町 長老教会	
組合	京城米倉町	大韓イエス教長老会漢陽教会(統)	全仁善	在日本朝鮮基督教会京都教会、大阪教会で伝道、日本基督教朝鮮教団の創立に総督府に協力。
	大邱	大韓イエス教長老会大邱鳳山教会(統)	崔正元	?
朝鮮半島南部地域における行方不明の教会				
元教派	教会名			
日基	馬山、全州、裡裡、榮山浦、木浦、鬱陵島			
メソヂスト	水原			
組合	大田、江景			
ホーリネス系	京城東四幹町、釜山北、金海			
救世軍	京城新堂町			
その他	始興、清州			
朝鮮半島南部地域における行方不明の教会 (* が付いた教会は戦時末期旧ソ連軍の攻撃の際被害を受ける)				
元教派	教会名			
日基	平壤幸町、新義州、羅津*			
メソヂスト	海州*、平壤南山町、鎮南浦、黄州、元山*、咸興*、興南、清津、羅南、會寧*			
組合	平壤山手			
ナザレン	平壤西城、平壤新里			

1. 在朝日本人教会の出典：『日本基督教団年鑑』1943年
2. 新教会の名称は現在の教会
3. 「？」は、その引き継ぎの過程がほとんど知られていないことを意味する。

上記で検討したように在朝鮮日本人教会が残した礼拝堂と牧師館などは、主に戦時下日本のキリスト者および教会との聯合活動を行い、教会合同の過程の中で日本人キリスト者、そして植民地政府と密接な関係を持っていた朝鮮人キリスト者によって引き継がれた。解放後の混乱期の中で、キリスト者及び牧師が新しい教会を創立し、教会の再建する際重要な土台の役割を果たしたと言える。

しかし最大50近くとされた在朝日本人教会、その中で現実的に調査が可能な朝鮮半島の南部にあった27個の教会のなかでも、敗戦後の行方が把握できたのは、上記の12教会に過ぎない。それらの教会はそれぞれの歴史認識を持って、教会の始まりに関する歴史を記録として明確に、あるいは極めて簡単に残した教会である。しかし解放後の左右のイデオロギーの対立、社会的な困難、朝鮮戦争を経て、多くの教会の礼拝堂と資料が焼失された事実および、韓国と日本との間でまだ解決できていない歴史認識の問題は、植民地朝鮮にあった日本人キリスト者と教会に対する記憶を消すか、あるいは希薄なものにしてしまった。特に、ある地方においては解放直後設立された教会の創立を含めて、その沿革さえ把握できない⁽⁹⁸⁾。地方の各教会歴史の発掘と共に、その中で消散されていった日本人教会の痕跡を見いだすことは今後の課題にしなければならない。

IV 新たな関係への土台

1 帰った人々

朝鮮から日本に引き揚げたキリスト者は、各地でちりぢりに別れたが、一部のキリスト者は日本でも連絡を取り合い集まる場合もあった。京城組合教会出身の信徒たちは『(旧)京城教会員家族名簿』を作り、1972年、京城組合教会に属したことがある家族に届けた。そこには京城組合教会に対する思い出や、

歴代教職者及ぶ夫人の名簿、逝去した信徒たち、そして作成時点の信徒たちの氏名、住所、電話番号、職業などが非常に詳しく載せられている。また日基に関しては、1975年3月、釜山日本基督教会の長老で、戦時中フィリピンで戦死した伊藤正一の召天30年を記念して、墓碑の除幕式と記念式があった。それが契機で伊藤を偲ぶ文集が⁽⁹⁹⁾発刊された。そこには伊藤に対する元釜山日本基督教会の信徒たちの思い出が述べられている。それによって釜山教会の信徒同士に連絡を取りつづけ、釜山信徒会を発足させた。

日韓の外交が回復されてからは、彼らが自分の思い出のある韓国の教会を訪ねる場合もあった。前述したように大倉系とされる大倉ヨネシが群山新興教会を訪ねた。京城教会の場合、秋月致の息子、秋月徹は礼拝堂を引き継いだ崔巨徳と連絡を取り続け、のちに徳寿教会の礼拝堂に安置されていた元京城教会の⁽¹⁰⁰⁾会員の遺骨や教会籍の原簿を持って日本に帰国した。仁川メソヂスト教会で長期間伝道した石丸幸助の息子も、1995年現在の仁川第一教会を訪ね、⁽¹⁰¹⁾交流した。元釜山日基の信徒も2004年光復教会を訪ね、⁽¹⁰²⁾植民地支配に対する謝罪をした。それに加えて植民地主義を超えて日本と韓国との間に最も有意義な交流をしたのは現在の日本キリスト教団青山教会と韓国キリスト教長老会草洞教会である。

2 植民地伝道からエキュメニカル宣教へ

京城若草町教会の最後の牧師宮内彰は、敗戦後、東京の長野に元若草町教会信徒と共に若草伝道所を開拓、伝道を開始した。在朝日基のなかでは唯一の例である。日本キリスト教団青山教会は前任者興侶正敏牧師の辞任後、若草伝道所の宮内を招聘することにした。宮内の同意があり1948年10月31日、就任式が執り行われた。宮内牧師の辞任後、若草伝道所からの要請によって青山教会は⁽¹⁰³⁾若草伝道所を合併した。

宮内は戦時期京城の朝鮮神学院の教授だったが、そのときの学生の一人だっ

た趙香録は、戦前京城若草町教会の礼拝堂を引き継いだ韓国基督教長老会草洞教会の牧師として1954年就任した。1965年8月趙香録は来日し、青山教会の宮内を訪ね、韓国と日本の「政治・経済・文化的なもろもろの障壁を超えたキリストにある真の交わり」について意見を交換した。趙香録と草洞教会から、両教会で姉妹教会の関係を結ぶ提案があり、それが受け入れられた。趙は「両教会の眼に見えない深いまじわりの結束が実を結び、いつか両国民が見上げることのできる、一つの眼に見る事件として現れることを望み、かつお祈り致します」と語った。⁽¹⁰⁴⁾ 両教会の代表はお互いに訪問し、1966年1月、姉妹関係を結び、交わりをした。

この関係は、ただ両教会の親善関係にとどまらず、より広い範囲のエキュメニカル宣教に拡大した。1973年2月23日から3月5日までの間、ソウルのYMCA講堂で会合があり、「韓日教会宣教協議会」が結成された。日本側からは宮内を団長とする日本キリスト教団所属の牧師たち、韓国側は趙香録などの韓国基督教長老会と大韓イエス教長老会所属牧師たち、合わせて20名が集い、日韓両国間の教会の連帯と教師同士の交流、相好協力を通してアジアと世界宣教に寄与する旨を表した。1974年2月27日から3月5日まで、東京の青山会館で第2回韓日教会宣教協議会が開かれ、1974年11月にはソウルで第3回目の協議会があった。第3回から台湾基督教長老会が参加して、「東北アジア教会宣教協議会」と改称した。このように毎年の協議会が続けられ、2014年6月には日本基督教団九段教会で第41回の会議が開かれた。韓国側では申益浩牧師を団長として22名、台湾側では、頼俊明牧師を団長として16名、日本側では宮内真⁽¹⁰⁵⁾（宮内彰の息子）を団長として22名が参加した。この協議会が終了後、次のような共同声明が発表された。⁽¹⁰⁶⁾

第41回 東北アジア教会宣教協議会 共同声明

(前略)

1. 初代教会は宣教（ケリユグマ）と教育（ディダケー）を通じて発展した。福音の躍動は今日においても変わらない。我々三国の教会はこの伝統を維持しつつ、主にある交わりのもとに教会形成に邁進することを宣言する。
2. 東北アジアの教会は青年の参加を得、有益な学びと共有を行うことができた。青年への伝道、青年たちが聖霊によって主への忠実を身につけるように、そのための願いと課題を共有している。この新しい青年の主にある活動を支援しつつ、今後もその交流を宣教協力の一環と位置付け継続する。
3. 三国の教会は政治的社会的諸事情に影響されつつも、み言葉の導きと祈りの力により、主にある一致を守り続け、神の国の到来を待望しつつ「主にある平和」を実現する努力を続ける。

我々は、この協議会を通して示された共通の課題と、各国の課題を共に確認し、これからも協力しつつ歩み続けることをここに宣言する。

願わくはこの良き志を与えて下さった主が、共に働きつつこれを成し遂げる力をも与えて下さるように祈る。

2014年6月15日

第41回東北アジア教会宣教協議会 参加者一同

それは、まさに相手ときちんと向き合うことによってできたエキュメニカル宣教である。植民地伝道が、歴史における一つの傷跡にとどまらず、未来への道を開いた肯定的な事例として評価すべきである。

V おわりに

1904年2月、大韓帝国に対する主導権をめぐる日露戦争中に始まった日本基督教会の釜山伝道からアジア太平洋戦争の敗戦まで約40年間、朝鮮では在朝日本人を中心とする多数の日本人プロテスタント教会があった。敗戦直後の朝鮮の状況と米・ソ両国の利害関係によって作られた38度線以南と以北におけるキリスト者の動きの中で、日本人キリスト者の引揚げ後、彼らが残した教会堂がどのように引き継がれたのかをできる限り明らかにした。多くの教会がその存在の記憶が消されたが、植民地伝道として生み出された教会が、日韓キリスト教のエキュメニカル宣教の土台になる場合もあったのが確認できた。そして現在に至ってはあまり覚えられていないものの、日本人キリスト者が残した礼拝堂および牧師館は解放直後複雑な状況の中で一部の朝鮮教会の開拓、あるいは再建の基盤になったのが確認された。

しかし、前述したように調査ができる現在の韓国にあった27教会の中でその行方がわかったのは12教会に過ぎないし、具体的な様子が明らかになったのもその中で一部の教会に過ぎない。在朝鮮の旧日本メソジスト教会、旧日本組合基督教会、救世軍、旧ホーリネス教会などの教会に関してもっと調べる必要がある。

そしてもう一つの課題として挙げられるのが日本に帰った日本人キリスト者の戦後の活動である。宮内彰と旧若草町教会の信徒が東京において開拓伝道をしたのはすでに述べられたが、その他の人物に関しては詳しく知られていない。日基京城教会の牧師だったが引揚げ後、北星学院で活動した村岸清彦⁽¹⁰⁷⁾の他、牧師たちはどのような思いをもって日本で生きていたのか。植民地経験は彼らの伝道にどのような影響があったのか。また信徒たちはどのように活動し、彼らが持っていた共通の経験はどのようなものだったのか等を明らかにすることも今後の課題にしたい。

注

- (1) 本稿は、2016年3月5日、関西学院大学大阪梅田キャンパスにおいて開催されたキリスト教史学会2015年度西日本部会（第10回）でも発表した内容を修正したものである。
- (2) 秋元茂雄「朝鮮釜山通信」『福音新報』第455号、1904年3月17日
- (3) 釘宮辰生「我が教会の韓国伝道」『護教』第859号、1908年1月12日。小川圭治・池明観編『日韓キリスト教関係史資料』新教出版社、1984年、85頁。
- (4) 剣持省吾「京城だより」『基督教世界』第1089号、1904年7月14日。
- (5) 朝鮮総督府学務局錬成課『朝鮮の宗教及享祀要覧』朝鮮総督府、1942年の統計による。
- (6) 先行研究として主に挙げられるのは、池明観「日本基督教会と朝鮮：一八九二年から一九二〇年まで」、『東京女子大學附屬比較文化研究所紀要』第39号、1978年1月、1-20頁。森平太「日本基督教会朝鮮中会の運命：池明観教授の論文にこたえて」『福音と世界』新教出版社、33巻第7号、1978年7月、62-72頁。澤正彦『南北朝鮮キリスト教史』日本基督教団出版局、1982年、17-71頁。古賀清敬「韓国強制合併と日本のキリスト教：旧日本基督教会を中心に」、『北星学園大学文学部北星論集』48巻第2号、2011年、87-100頁。上月一郎『釜山에서의 日本人 教会의 起源과 發展1876—1945：旧日本基督教会 釜山教会과 中心으로』高神大学校大学院修士論文、2013年。
- (7) 日基の朝鮮伝道の開始と展開については、拙稿「植民地朝鮮における日本基督教会：朝鮮伝道の開始から朝鮮中会の建設まで」『キリスト教社会問題研究』第63号、2014年、53-84頁。そして、「植民地朝鮮における日本基督教会：朝鮮中会の建設から15年戦争の開始まで」『基督教研究』76巻第1号、2014年、103-121頁を参照。
- (8) 森田芳夫『朝鮮終戦の記録：米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』巖南堂書店、1964年、67-74頁。
- (9) 同上、78-80頁。
- (10) 同上、81頁。
- (11) 同上、192-193頁。
- (12) 同上、284-286頁。
- (13) 同上、284頁。
- (14) 朴승길 「米軍政의 宗教政策과 基督教의 혜계모니形成」、『社会科学研究』大邱가톨릭대학교社会科学研究所、5巻第10号、1998年、75頁。
- (15) 同上、75頁。
- (16) 『朝鮮に於ける宗教及享祀要覧』朝鮮総督府学務局社会教育課、1938年。北緯38

度線は京畿道と江原道を横断していたが、京畿道の多くは南に、江原道の多くは北に当たっていたので、便宜上京畿道は南に、江原道は北の方に分けた。

- (17) 朴승길、前掲書、77頁。
- (18) 安종철『米国宣教師와 韓米關係1931—1948』韓国基督教歴史研究所、2010年、251-252頁。
- (19) From Underwood, H. H. to Dr. Hooper, 1946.3.1., Presbyterian Church in the U.S.A (PCUSA) Borad of Foreign Mission Korea Mission Reports 1911~1954. 以下 *PCUSABFM-KM* と略する。
- (20) 金錫俊『米軍政時代の国家와 行政：分断国家의 形成과 行政体制의 整備』梨花女子大学校、1996年、239-242頁。
- (21) 李惠淑「米軍政期日本人財産의 处理와 農業政策」、『社会와 歴史』韓国社会科学会、第23号、1990年、283頁。
- (22) 『重要公開記録物解説集 V：国税庁・成業公社編』大韓民国国家記録院、2012年、5頁。
- (23) 李惠淑、前掲書、282頁。
- (24) 「朝鮮通信」『日本基督教団教団新報』第2530, 1, 2 合号、1945年10月1日、10日、20日。
- (25) From Underwood, H. H. to Dr. Hooper, 1945.11.19. *PCUSABFM-KM*.
- (26) 金良善『韓国基督教解放十年史』大韓예수교長老會總會宗教教育部、1956年、44頁。
- (27) 同上、46頁。
- (28) 韓国基督教歴史研究所北韓教会史執筆委員会『北韓教会史』韓国基督教歴史研究所、1999年、356頁。
- (29) 同上、49頁。
- (30) 韓国基督教歴史研究所『韓国基督教의 歴史 III』基督教文社、2009年、46頁。以下『韓国基督教の歴史 III』と略する。
- (31) 金良善、前掲書、62-67頁。また、閔庚培『大韓예수교長老會百年史』大韓예수교長老會總會、1984年、536-538頁を参照。
- (32) 朝鮮中央通信社『朝鮮中央年鑑』朝鮮中央通信社、1950年、86-87頁。同上、45頁より再引用。
- (33) 金良善、前掲書、69-70頁。
- (34) 同上、49-50頁。
- (35) 『韓国基督教の歴史 III』、16頁。
- (36) 金良善、前掲書、51頁。金良善は慶南老會の再建を11月3日と記しているが、その組織は9月18日に行われ、12月3日老會を開會した。また、釜山老會編纂委員会『釜山老會史 (1905-2005)』大韓예수교長老會釜山老會、2005年、423頁。

- (37) 全州西門教会100年史編纂委員会『全州西門教会100年史：1893-1993』쿰란、1999年、443頁。
- (38) 李徳周「南部大会의 組織과 消滅」『韓国基督教史研究』第30号、1990年、25頁。『韓国基督教の歴史 III』17頁から再引用。
- (39) 『朝鮮예수교長老會總會三十三回會議錄』朝鮮예수교長老會總會、1943年、1頁。
- (40) 吳益煥「反民族行為処罰法」宋建鍋編『解放前後史의 認識』한길社、2004年、212-217頁。
- (41) 吳益煥、同上、212-213頁。崔徳成『新版韓国教会親日派傳統』知識産業社、2006年、480-498頁も参照。
- (42) 『韓国基督教の歴史 III』、21頁。
- (43) Hans Küng, *Die Kirche*, Verlag Herder KG Freiburg im Breisgau, 1967. 筆者が参考したのは韓国語訳、鄭지런訳『教会』、한글出版社、2007年、15頁。
- (44) 鳳山教会70年史編纂委員会『鳳山教会70年史：1945-2015』(https://issuu.com/martianstory/docs/22、2016年3月3日現在) 47-48頁。
- (45) 同上、50頁。
- (46) 『徳寿教会60年史：1946-2006』大韓예수교長老會徳壽教會、2008年、96-97頁。しかし、編纂者は京城日本基督教会や日本基督教団など日本のキリスト教会に対する正確な理解は持っていない。
- (47) 安洞教会歴史編纂委員会『安洞教会90年史』、2001年、165頁。
- (48) 「朝鮮基督教聯合會」『福音新報』第2202号、1938年5月19日。
- (49) 『朝鮮예수교長老會總會第二十九回會會議錄』1940年、43頁。
- (50) 崔巨徳『나의 人生行路』徳壽教會、1986年、134頁。
- (51) 「金鍾大」親日人名事典編纂委員会『親日人名事典』民族問題研究所、2009年。
- (52) 『安洞教会90年史』、170頁。
- (53) 『徳壽教會60年史』、97-98頁。
- (54) 『朝鮮예수교長老會總會第三十回會議錄』1941年、20頁。朝鮮における松本卓夫の活動に関しては、洪伊杓「松本卓夫と朝鮮半島」『関西学院史紀要』第19号、2013年、53-103頁を参照。
- (55) 編集部「韓國神學大學40年의 발자취」『神學研究』韓神大學校韓神學研究所、第22号、1980年、335頁。
- (56) 『徳壽教會60年史』、99頁。
- (57) 徳壽教會元老牧師、孫仁雄とのインタビュー、2014年7月1日。孫仁雄牧師は1970年伝道師として赴任、副牧師を経て、1977年徳壽教會の主任牧師として就任、2012年に引退するまで、ひたすら徳壽教會で伝道した。
- (58) 孫仁雄牧師とのインタビュー、同上。
- (59) 鄭薰『草洞教会沿革』、1957年10月。崔東益「京城若草町教会와 草洞教会」

- 『풀밭 (草地)』第154号、2014年12月、86頁から再引用。
- (60) 「劉載奇」『親日人名事典』2009年。
- (61) 崔東益、前掲書、87頁。
- (62) 崔東益「草洞教会創立67周年、敦義洞移転40周年、第6代末成浩牧師」『풀밭 (草地)』152号、2012年、34頁。
- (63) 崔東益、同上、36頁。
- (64) 金守珍『京都教会의 歴史：1925～1998』쿰란出版社、1998年、108頁、脚注(5)。
- (65) ここで、創立年度と黄善伊牧師の赴任年度に関して、三角教会の紹介と派遣教会の龍山教会の記述が一致しない。これに関して、現在の三角教会の林ジュンヒョン主任牧師は、教会創立に関する記録は戦争中に失われ、何も残されていないと語った(2015年7月16日のインタビュー)。
- (66) 親日人名事典編纂委員会『日帝協力団体事典』民族問題研究所、2004年。
- (67) 延世大学のホームページにおける歴代の学長の紹介のページ (http://www.yonsei.ac.kr/contents/intro/pastpresidents3_3.html, 2015年7月20日現在) と韓国学中央研究院編『韓国民族文化大百科事典』東方メディア株式会社(<http://encykorea.aks.ac.kr/>)参照。
- (68) 「朝鮮通信 (其五)」『福音新報』第2103号、1936年6月11日。
- (69) 「彙報」第2034号、1935年2月7日、「教会の動向」第2036号、1935年2月21日。
- (70) 大韓예수교長老會釜山老會編纂委員會『大韓예수교長老會釜山老會100回史』大韓예수교長老會釜山老會、1975年、217頁
- (71) 光復教会編纂委員會『光復教会35年史』光復教会、1980年、186-187頁。『光復教会35年史』では、教会の創立自体に関しては何も書かれていない。
- (72) 鄭玉均『全北地域改新教初期教会의 形成과 그展開過程에 對한 研究 (1892年～1945年)』、韓神大学校牧會學博士院博士論文、1999年、56-57頁。
- (73) 群山新興教会ホームページ (mysh.org, 2015年7月20日現在) と『韓国郷土文化電子大典』(www.grandculture.net, 2015年7月20日現在)の「群山新興教会」項目参照。
- (74) 2014年8月20日、教会の匿名の長老とのインタビュー。
- (75) 1909年慶尚北道生まれ、大邱啓聖学校、平壤崇實専門学校、日本の東北帝国大学卒業、啓聖中学校校長、啓明基督大学学長、2004年死去。「申泰植」(ko.wikipedia.org, 2015年7月22日現在)。
- (76) 東路教会50周年記念事業委員會編『東路教会五十年史』大韓イエス教長老會東路教会、2001年、78-79頁。
- (77) 1908年生まれ、アメリカのオーベリン大学で修学、ハワイ韓人教会、ワシントン韓人教会、ソウルの南大門教会などで牧會、YMCA 連盟總務、大邱信明女子高

- 等学校の校長を経て、韓国精神衛生院という精神相談所開設。정성환『南大門教会史1885-2008』大韓예수교長老会南大門教会、2008年、265-268頁。閔庚培『韓国教会의 社会史』延世大学校出版部、2008年、330頁。
- (78) 閔庚培「韓国歴史그 뒷이야기」no.211『韓国長老新聞』第1412号、2014年5月17日。
- (79) 「申厚植」『親日人名事典』2009年。
- (80) 『東路教会五十年史』、181頁。
- (81) 南山教会50年史編纂委員会『南山教会50年史』基督教大韓監理会南山教会、1996年、179頁。
- (82) 「李奎甲」基督教大韓監理会歴史委員会『韓国監理教人物事典』基督教大韓監理会、2002年。
- (83) 「金仁泳」『親日人名事典』、『韓国監理教人物事典』。
- (84) 「朴淵瑞」『親日人名事典』、『韓国監理教人物事典』。
- (85) 「卞鴻圭」『親日人名事典』、『韓国監理教人物事典』。
- (86) 竹内録之助「京城教会の思出」、紀伊国幾子など編『(旧)京城教会員家族名簿(1972年3月末現在)』1974年、4頁。この資料は京城組合教会の元牧師だった遠藤作衛の孫、遠藤浩氏から入手。
- (87) 漢陽教会35年報編纂委員会『漢陽教会35年報(1945-1980)』、1980年、iii頁。
- (88) 『漢陽教会35年報(1945-1980)』、2-3頁。
- (89) 2012年11月27日、崔ルトン担任牧師とのインタビュー。
- (90) 第一教会60年史料集発刊委員会『仁川第一教会60年史料集』、2007年、64頁。
- (91) 松岷聖潔教会ホームページ (<http://www.songhyun.org/>、2015年7月26日現在) 教会の沿革。
- (92) 仁川市史編纂委員会『仁川市史』仁川市、1973年、496-497頁。『仁川第一教会60年史料集』116-117頁から再引用。ただし、1946年はまだ「大韓イエス教長老会」が設立されていない時期であるので、『仁川市史』の編纂者の錯誤と考えられる。
- (93) 『朝鮮中央日報』第1988号、1933年9月29日。
- (94) 大韓예수교長老会釜山中央教会編『釜山中央教会50年史』1996年、68-69頁。
- (95) 『東路教会五十年史』、59頁。
- (96) 韓国基督教長老会中部教会ホームページ (<http://www.djbc.co.kr/>) の教会の歴史参照、2015年8月31日現在。
- (97) 『東路教会五十年史』、59頁。そして『鳳山教会70年史：1945-2015』、45-49頁参照 (<https://issuu.com/martianstory/docs/22>、2016年3月3日現在)。
- (98) 韓国基督教長老会木浦教会、老会長牧師との電話インタビュー、2015年7月9日。
- (99) 合田初太郎編『伊藤正一：信仰・事業・生涯』文方社、1977年。
- (100) 秋月望氏からの2014年4月29日のメール内容。

- (101) 第一教会60年史料集発刊委員会『仁川第一教会60年史料集』仁川第一教会、2007年、66頁。
- (102) 上月一郎、前掲書、165頁。
- (103) 青山教会史編集委員会編『日本基督教団青山教会史：伝道開始 明治三十六（一九〇三年）』1976年、141-142頁。
- (104) 同上、184-185頁。
- (105) 崔東益「京城若草町教会와 草洞教会」、97-98頁。
- (106) 日本キリスト合同教会桜台教会ホーム・ページ（www.sakuradaichurch.com）に紹介された記事から（2015年8月31日現在）。この記事によると台湾からの参加者は11名である。
- (107) 「村岸清彦」『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年。しかしこの事典では、村岸が日本に戻って活動した学校を「北里学園」として紹介しているが、事実は「北星学園」である。

（第19期第3研究会による成果）